
Genetic Code -Apocataasis-

聖河リョウ

タテ書き小説ネット Byヒナプロジェクト

<http://pdfnovels.net/>

注意事項

このPDFファイルは「小説家になろう」で掲載中の小説を「タテ書き小説ネット」のシステムが自動的にPDF化させたものです。この小説の著作権は小説の作者にあります。そのため、作者または「小説家になろう」および「タテ書き小説ネット」を運営するヒナプロジェクトに無断でこのPDFファイル及び小説を、引用の範囲を超える形で転載、改変、再配布、販売することを一切禁止致します。小説の紹介や個人用途での印刷および保存はご自由にどうぞ。

【小説タイトル】

Genetic Code - Apocatastasis -

【Nコード】

N8514M

【作者名】

聖河リヨウ

【あらすじ】

遺伝子が人生のすべてを決める。

アカデミー遺伝子管理局が支配する城壁の街では、完璧な遺伝子をもつ“貴族”たちが何不自由なく暮らしていた。

主人公ジーンは、ある日“Genetic Bible”と呼ばれる謎の黒聖書を手に入れる。

書物に書かれている内容は、彼らの常識を覆す驚くべきものだった。

“貴族”と“愚民”

“ 教皇 ” と “ 皇帝 ”

イニシエノ書に記された世界の ” 真実 ”

閉鎖的世界から少年は脱出することができるのか

Prologue (前書き)

処女作品となります。まったりと更新していきます。
どうぞよろしくお願いいたします。

Prologue

世界を形作る大陸の大半は荒野と化した

人間が生を育める大地は もはや一つ

第一大陸と呼ばれた 栄光の地

教皇と皇帝 二つの権力が血なまぐさい戦争を引き起こした彼の地のみ

争いは今も続いている

引き裂かれた大地の叫び声に 耳を閉ざして

皇帝が手にした最後の砦

” 城壁の街 ”

教皇の手から砦を守らんとする 皇帝の民たちは

三重の城壁をつくり 自らを閉じ込めた

全ては教皇への復讐の為に

辱めへの復讐の為に

復讐のためならば どんな犠牲も厭わない

皇帝が愛した民たちの 病んだ精神は

やがて

純粹無垢な生贄の仔羊を 喰らい尽くすこととなるだろう

終わりなく 我は過去にも未来にもなからえん

我には 始めも終わりもなかりけり

永遠に我は道を走りゆかん

終わりなく それはいつ終わるともなし

1・屋根裏に潜む賢

＜古の大陸に生きる人間たちは、「遺伝子」と呼ばれるモノで階級分けされていた。

教皇と皇帝の争いが始まる遙か昔から、人間にとって「遺伝子」は一生を左右するモノであった。

優れた遺伝子を持つ者は「貴族」と呼ばれ、人生のあらゆる面において待遇を受けた。

人類は、より優れた能力を持つ「遺伝子」を後世に継ぐべきだと考えた。

世界の長となるためには、自らをひたすら高めるほかなかった。

「貴族」を生み出す過程の中で、失敗作とされたのが「愚民」である。

「貴族」より、身体能力も精神能力も劣った、「神から見放された民」を意味する。

古の技術だけでは、完全な「貴族」を作るとは難しく、世界の大半は「愚民」で構成されることになる。

それでも、「貴族」の支配は止まず、生まれながらにして「愚民」と称される人々は常に不満を抱えていた。

そんな折、教皇と皇帝の領土問題から戦争が勃発する。

「愚民」は生き長らえるために、「貴族」に尽くすという選択肢のみを与えられた。

戦争が長引くにつれ、困憊の色を最初に見せたのは、皇帝だった。

隙を見せた仇に、教皇が攻撃の手を休めるはずはなく。

追い込まれた皇帝は最後の砦として、“城壁の街”を選んだ。

核兵器ですら破壊できない三重の防壁の内側に、身を寄せたのである。

さすがの教皇も、三重の防壁の前には、頭を悩ませた。

やがて教皇派の間で「貴族」と「愚民」の内乱が勃発。

未だ姿を見せぬ皇帝は沈黙を守っている。 >

Genetic Bible - アゼル書 第2章より抜粋

「また、そんなもの読んでたのか、」

最終礼拝を告げる鐘の音を無視して、ヨハン・ストリウスは友人から本を取り上げた。

夕刻の光が遮られる屋根裏では、歩を進めるたびにぎしぎしと床が

悲鳴をあげ、埃が舞い上がる。
手入れの行き届いた淡蒼色の髪に、埃がつくことを疎ましく思いながら、ぱらぱらと本の頁を捲る。

「アカデミー中等部首席のお前が…一体、何処の闇ルートで手に入れた。」

本を取り上げられた少年は、紺碧の制服に埃がつくことも厭わず、ふて寝する。

「おい…ジーン。聞いてるのか？」

ヨハンの手が、ジーン・エヴァルシオンに触れるか否かの瀬戸際だった。

「煩いなっ…、俺が何を読もうと、ヨハンには関係ないだろ！」

闇よりも深き漆黒の相貌が、ヨハンを威嚇する。
やれやれ、とヨハンは溜息をつきながら、ジーンの頭をくしゃくしゃと撫でた。

「何…すんだよ！」

「ほれ。健康診断の結果。…わざわざ持ってきてやったんだ、少しは感謝しろよ、」

紙切れ一枚をひらりと落とすと、ジーンが素早い動きでそれを奪い取った。

屋根裏の天井につけられているランプに火を灯し、まじまじと書類を見つめる。

紙切れに書かれているのは、全てランダムにはじき出された数字だった。

”城壁の街”では、15歳以下の子供は人間とみなされない。

”城壁の街”最大にして最高のデータベース・マザーコンピュータは、子供たちをただの数字として認識する。

通常は解析コードを使ってデータを読み取るのだが、ジーンには必要のないものだ。

晴で数字の列を追うだけで、彼の頭は瞬時に文字をはじきだす。

「くそっ…」

苦虫を噛み潰したような表情で、ジーンは結果報告書を丸めた。

「おやおや。どうしたのかな、ジーン君？」

威圧するかのような長身で、ヨハンが座り込むジーンの顔を覗いた。

「はーん、さては身長が伸びなかったことを気にしているのだな！」

毎年同じことを繰り返しては、ヨハンはジーンの機嫌を損ねている。黙り込む友人を見ると、どうやら凶星のようだ。

ジーンは他の少年たちと比べると、成長が遅い。

クラス内でもジーンの身長が笑いのタネになることが多かった。

アカデミー中等部首席の持つ、たったひとつのコンプレックスに、

ヨハンは安著するのだ。

これ以上”完璧”に近づいたら、ジーンはジーンでなくなってしま
う。

教授会を凌ぐほどの頭脳を持ち、遺伝子ランクはトップクラス。

将来はアカデミーの最高幹部になると噂されるほど、ジーンは周り
から期待されている。

ジーン自身も自分の才能を認めており、鼻にかける時期があった。

しかし、身長の数だけはどうしても気になるらしく、15歳になる
現在ではおとなしくなっている。

「うっさい！俺を見下ろすな！」

「どれどれ。首席殿の今年の身長は……と……」

床に転がる紙くず同然の報告書を拾い上げ、がさがさと広げる。

ヨハンはジーンと違い、解析コードを必要とする人種だ。

ポケットから取り出した小型機械で、マザーコンピュータからコー

ドをダウンロードする。

「止める…！ヨハン！」

小動物のように、ジーンが跳ねた。

ヨハンの背に抱きついて、情報漏洩を阻止しようとする。

いきなり飛びつかれるとはヨハンも想定していなかったらしく、声をあげると同時に右手から機械を落とした。

落下した金属機は更に埃を舞い上がらせ、ヨハンの気管に入り込む。

「おいっ…ジーン…降りろ！ぐえっ…オレが悪かった…！」

ぐいぐいと細腕で首を絞めてくるジーンに、ヨハンは苦笑する。

しばらくジーンはヨハンから離れなかったが、ふいにその漆黒に暁の印をうつすと、そっと離れた。

「いってえ…乱暴にするなよ、髪が乱れちゃった…」

ジーンの拘束から逃れたヨハンは、ぼさぼさになった毛先を指に絡めた。

「ヨハン…」

「ん、なんだよ急におとなしくなって。」

「首…のどこ……」

まるで恐ろしいものを見たかのように、ジーンは自分の首筋を指差した。

「…ああ、コレ？」

ヨハンは制服の釦を外し、暗橙色の灯りの下に首筋を晒した。
古代詠唱文字で？を意味する焼印があった。

「オレ、先月16歳になったからさ。爵位貰ったんだ、」

ヨハンはジーンと同学年のクラスにいるが、実際は留年という形で居座っている。

ジーンより一つ年上なのは、案外知られていない。

”城壁の街”のシステムのひとつで、爵位制度というものがある。
16歳以上の人間は、一人前の大人と見なされ、それぞれの遺伝子ランクによって爵位を与えられる。

爵位には5つの種類があり、最下位は男爵、最上位は公爵となる。
爵位を与えられた者は、その証として焼印を押される。

場所は自由だが、大半の者はすぐ証明できるように、首筋や手首な

どに押す。

「オレの爵位は子爵だってさ。オレとしては伯爵くらいになりたかったけど、マザーの命令だからな。…しょうがないか、」

爵位を有する者は、15歳以下の子供にかけられる制限の一切を無視できる。

マザーコンピュータの一般閲覧禁止区域に進入することもできれば、結婚の申請もできるのだ。

「でも、オレはもう自由なんだ！これで、子供の見ちゃ行けない世界を……」

ヨハンの言葉を遮ったのは、ジーンの呪われた言霊だった。

「…何が自由なものか…。俺たちは一生拘束され続けるんだ……」

「ジーン……？」

「…なんでもない、」

ヨハンから晴をそらし、ジーンは小窓から見える巨大な建造物に視

線を移した。

”城壁の街”の治安を守り、秩序をつくり、未来を育む組織・アカデミー本部。

閉鎖的な街の全てを、アカデミーは管理している。

ジーンたちが通う学校は、本部の敷地内に建てられていた。

子供たちを監視しているかのように、聳え立つ銀の建物は、夕刻の光を遮り影を作る。

中世彫刻を模しているらしく、外見は貴族らしい豪華なものだが、内部はいたってシンプルな構造だ。

毎日、隣接する校舎からアカデミー本部を見ているが、巨大すぎて収まらない。

ジーンは、この廃墟と化した屋根裏部屋・幼馴染と勝手につくった秘密基地からアカデミーを眺めるのが好きだった。

刹那、再び街中に鐘の音が響き渡る。

静寂を破り、神に感謝の意を表す音は心地よい。

「うっわ…やべえ！おい、ジーン、此処出るぞ！」

ぐい、とヨハンに腕を引かれ、ジーンはうろたえた。

「なんで？」

「デイスと一緒に帰って約束したんだ。…また秘密基地で学校さぼってたのバレると、オレ達今度こそ太陽を拝めなくなる！」

「っ…っっっっ、」

ジーンの脳裏に、友人の一人であるイエルデイスの顔が浮かんだ。時間に頼み彼は、1秒でも遅れると何をしでかすかわからない。廃墟を飛び出した少年たちは、闇が迫る夕刻の方角へ向けて走り出した。

2・羊の色を喰らう光

アカデミー本部敷地内にある礼拝堂は、教父・フィデルファの鶴の一声で完成した。

白をベースにした建築物。高い天井にはランプが散りばめられ、聖歌隊の声がよく響く設計になっている。

礼拝堂の重い木製の扉が開かれる。

礼拝担当司祭が退出するまで流れ続けるパイプオルガンの音色にあわせて、アカデミーの生徒たちは教会の門をくぐった。

午後まできつちり組み込まれているアカデミー特製カリキュラムのおかげで、生徒たちの表情は疲れきっている。

ただでさえ眠気をさそう礼拝から解放された爽やかさは、新入生を除いては見られない。

小等部からあがったばかりの1年生は、新鮮な聖書の世界や聖歌隊の歌にあれこれ騒いでいたが。

1年もたてば、周りの上級生と同じく、聖書朗読中に熟睡するはめになるだろう。

礼拝堂の入り口から少し離れた場所に、ハナズオウの木が植えられている。

ファルヴァの月に桃色の花を咲かせる大樹。

強い光によってできる影の下に一人の男がたっていた。

礼拝堂から出てきた数人の下級生は、大樹に黒い影を見るなり顔を強張らせる。

獣じみた紫の双眸が、じっと礼拝堂の扉を睨み付けていたからだ。

男は、ホルディアの月になるといいうのに、黒のロングコートを着ている。

袖から除くのは生身の手ではなく、シックな皮製の手袋だ。

漆黒のソフトハットを目深に被り、何かを待っているようだった。

足元には旅行用スーツケースが二つある。

胸ポケットから古びた懐中時計を取り出し、硝子に映る自分を睨む。正確には、約束の時間を計っているのだが。

「イエルデイスっ……！！」

男は懐中時計の蓋を閉じ、顔をあげた。

人ごみをかきわけて、ヨハン・ストリウスとジーン・エヴァルシオンが大樹の方へ走ってくる。

「イエルデイス…待ってないよな？セーフだよな！？」

乱れた息を直す間もなく、ヨハンが男にすがりつく。

「…貴様ら、また礼拝をサボったな、」

男はヨハンより更に高い視線から、友人を見下ろした。

190センチを超える細身の長身は、何処にしようが目立ってしま
う。

ジーンと並べば、更に彼のコンプレックスを刺激することになるだ
ろう。

「げっ…なんではれて……」

イエルデイス・クレヴィスは、ヨハンの髪についた埃をつまみ上げる。

「貴様らの行動は単純だからな……」

ホルディアの風が、埃を攫う。

「…帰るぞ……」

深く追求されなかったことに胸をなでおろす二人を無視して、イエルデイスは歩き出す。

「帰るって…何処へ？」

ジーンの問いに答えたのは、ヨハンだった。

「修道寮が満室になったから、ジャステイス家に一時帰宅するんだとさ。」

「じゃあ、今からエストの家へ行くのか……」

「そういうこと。さ…追いかけてよ。あいつは喋らない分早足だからな…」

パイプオルガンの音は止んでいた。

大樹を揺らす風の音を感じながら、少年たちはイエルデイスの背中を追いかけた。

イエルデイス・クレヴィスは、代々ジャステイス家に仕える一族の一人だった。

ジャステイス家はアカデミー構成員の古株で、城壁の街の北方区域を治める貴族である。

クレヴィス家は、曾祖父の代からジャステイス家の世話をしている。イエルデイスは早くに母親と父親を亡くした。

ジャステイス家の人間がいわば彼の家族のようなもの。その忠誠心に揺らぎはない。

少年達は北区に通じる大通りを歩いていた。帰宅ラッシュで周りは人で溢れている。

早くもショーウィンドウのネオンが灯っている店があり、裏の顔を露わにする路地裏も活気付いている。

人ごみの中でも、長身のイエルデイスは目立つ。全身黒尽くめに加え、両手には硬いスニーカー。

闇世界の人間に間違われても無理はない。

貴族の称号すら貰っていない子供なのに、しばしば教授の付き合いもさせられている。

イエルデイスは何も語らない。

自らを語るうとはしない。

ジャステイス家以外の人間と心を通わせたことは皆無に等しい。

ジーンやヨハンも例外ではない。

初めて会った時、イエルデイスは一言も口をきかなかった。

そのときの後遺症が残っているのか、ヨハンはイエルデイスと無意識に距離を置いている。

「エストの家に行くのは久しぶりだなー」

半歩前を歩くイエルデイスは、ヨハンの言葉に反応を示さない。

ヨハンの隣を歩くジーンは、シトロン売りから買った飲み物を一気に喉奥に流し込んだ。

「ほんと……。何ヶ月ぶりだろ。デイスもしばらく会ってないんだろ?」

「…半年ぶりだ…」

ジャステイスの土地を踏むのは久々である。

あの家には、イエルデイスの守るべきものがある。

一刻も早く戻りたかった。

通りの露店に気を取られている二人を無視して、イエルデイスは速度を速める。

沈みかけている西の光が、イエルデイスの紫の相貌を刺激した。

高層ビルに乱反射する神の御技は、少年の視力を奪い取る。

イエルデイスの睛は、光に対して過敏だった。

遺伝子構造に問題があるため、16歳を過ぎても貴族の焼印をもらえない可能性が高い。

貴族を名乗らぬ人間は、城壁の街ではもはや塵同然だ。

我が子の未来に絶望しか見出せなかった身体の弱い両親は、最後まで嘆き続けた。

イエルデイスの障害を知る者は少ない。

常人ならば微塵も感じぬ光を、イエルデイスの睛はかまわず受け入れる。

眩暈がした。

足元がぼやけ、重心がうまく定まらない。

夕焼けの光はじりじりとイエルデイスの精神を焼き尽くす。

睛を細めても、害の光は突き刺すように入ってくる。

「っ……………」

「デイス！」

イエルデイスの左手が、軽くなる。

見れば、ジーンがスーツケースを奪い取っていた。

「何を…する…。」

あまりの眩しさに耐えられず、イエルデイスは左手で両眼を覆った。

「莫迦野郎…！どうして、何もしないんだよっ！」

ジーンの唐突すぎる行動に、ヨハンは足を止めた。

彼は何をしているのだろう。

何故、イエルデイスは苦しそうな顔をしているのだろう。

「礼拝堂にいたときからおかしいと思ってた。…何故サングラスをかけない。デイス、」

イエルデイスは左手を下ろし、ゆっくりと瞼をあけた。

少量の闇が、イエルデイスの双眸を回復の道へ誘う。

「お、おい…どうしたんだよ。イエルデイス…、ジーン……？」

「ヨハン、お前…気づかなかったのか、」

重いスーツケースを片手で持てるほど力のないジーンは、両腕でそれを抱きしめていた。

真顔で攻められ、ヨハンはたじろぐ。

「…気づかなかったって…何が？」

「イエルデイスの晴のことだ。…彼は遺伝子構造に欠陥があつて、…その所為で過敏症になつてゐるんだ…。光に対して、」

イエルデイスは内心驚いていた。

ジーンとヨハンには、欠陥情報を伝えていない。

天才と称えられる少年は何時その情報を手に入れたのだろうか。

「何処でそれを……」

呻くように呟いて、ジーンを見下ろす。

「初めて会つたときから気づいてた。デイスの晴の色素つて…薄いだろ。」

眉間に皺寄せるのも、日中外に出ないのも、全部光の所為。…過敏症はマザーにアクセスして調べただけどさ。」

厄介なものだ。

人の心に踏み込んでくる仔羊というものは。

踏み荒らすだけ荒らしておいて、主の心なんて理解しようとしなない。

「イエルデイス…辛いときは辛いつて言えよ。…お前には、言葉があるだろ。…声が、あるだろ。」

イエルデイスは答えない。

否、何も言えなかった。

代わりに内ポケットからサングラスを取り出し、目を保護する。

精一杯の照れ隠しだった。

サングラスは光を遮りはするが、視界を闇色に染めてしまう。

ジーンの手が、そっとイエルデイスの手に触れる。

誘導しようというのだ。

「おい、ヨハン！お前も手伝えよ！」

「はいはい、わかりましたよ。…イエルデイスはエスト嬢の騎士だから…。大切にしねえと、」

ヨハンがジーンの代わりにスニーカーを持ち、ジーンがイエルデイスを誘導する。

羊たちの色を殺す光は、次第に闇に飲まれて消滅した。

3・Genetic Bible

イエルデイスの晴と、闇夜の空気に毒されるのを考慮して、少年達は黒馬車に乗った。

オペラ座やカジノへ向かう紳士淑女がよく使う交通手段。

黒馬車は他の馬車より値は張るが、乗り心地は最高である。

北区へ向かうターミナルはすぐ其処だったが、あえて列車には乗らなかった。

列車に備え付けられている人工灯は、自然光の倍以上の破壊力を持つからだ。

人前で視力の欠陥を晒すことが、自殺行為に等しいことを、イエルデイスは知っている。

遺伝子の欠陥を持つ子供だからこそ、慎重に生きねばならない。

サングラスをかけなかったのも、欠陥を感じかねないためだった。通りを歩く貴族の中には、眼鏡やモノクルといった装飾品を身につけている者がいるが、あくまで洒落込んだ装飾にすぎない。

イエルデイスのサングラスのように、直接睛を護るといった機能は皆無である。

暗幕を少しだけずらし、ジーンは過ぎ行く景色を眺めていた。

ネオンの光は、昼間と錯覚させるような明るさで、けたたましい。

「なあ、イエルデイス、」

馬車の沈黙を破ったのは、ヨハンだ。

猫脚座椅子にクッションを敷き詰めて腰を下ろし、菓子置き的小型机に頬杖をついている。

緩めたタイが、馬車の揺れに合わせて今にも落ちてしまいそうだ。

さりげなく釦を外し、シャツを着こなしているところは、いかにも貴族らしい。

「…なんだ…」

イエルデイスはヨハンと対面して座っていた。
暗幕から洩れる光対策のため、サングラスはかけたままだ。

「お前さ…エスト嬢とどこまで行ってんの？」

再び沈黙が流れる。
ヨハンの緑翠の睛は、イエルデイスの睛の動きを探ろうと必死だった。

「…くだらぬ………」

消え入りそうな声だった。
イエルデイスの口は一文字に結ばれており、動揺しているのかすらわからない。

「俺はジャステイス家に仕える身。…俺の気持ちが入る隙など、ない………」

「…誕生日くらい、祝ってやればいいのに…。」

呟いたヨハンの言葉に、イエルデイスが反応を見せた。

サングラスを外し、色素の薄い紫の双眸できつとヨハンを睨み付ける。

「お、怒るなよ…。ただ…ちょっと聞いてみただけだって…。あつ、そうだ！」

苦し紛れに、ヨハンは鞆から一冊の本を取り出して見せた。

「ジーンが闇ルートから新しく買ってきたモノなんだけどさ、」

ヨハンの手にあるのは、紛れもなく” Genetic Bible ”である。

「ヨハン…！それ、返せよ！」

ジーンが立ち上がるうとした瞬間、馬車の車輪が何かのし上がつたらしく、がたと揺れた。

バランスを崩しかけたジーンをイエルデイスの腕が支える。

危うくヨハンと衝突するところだった。

「おいおい大丈夫か？子供は危ないから座ってる、」

「子供扱いすんな！この万年留年男！」

ヨハンの留年は、仲間内では周知の事実だ。

今更そんなことを言われても、ヨハンの心は傷つかない。

「…それにしても、この本…でたらめだらけだな、」

何度見ても、正史の頁は出てこない。

「イエルデイスも見てみるよ、」

黒皮の製本を受け取り、イエルデイスは睛を細めた。

アカデミーで学んできた知識では、まったく歯がたたない文章だった。

ところどころ解読不能な文字が組み込まれており、マザーコンピュータからダウンロードしてきた文字コードでも解けないだろう。

「誰が…書いたのだ………」

だが、城壁だけでは自然の恐怖から逃れることはできなかった…」

ヨハンの語る言葉は、歴史の教科書に載っている正史だ。

”城壁の街”に生きる者ならば誰でも知っている。

「そこで人類は、遺伝子操作で自らを強化することを考え出した。自然にも勝るような遺伝子を作ったんだ。

遺伝子の改良を重ね、誕生したのが”貴族”だ。

その怪しい本には”愚民”とか書いてあるが、”愚民”なんてもともと存在しないんだ、ジーン。」

「…災害で生き残った人類を”平等”に”貴族”としたわけか…」

イエルデイスも正史の見解に賛成らしい。

「そう。皆、平等に貴族となつて、この街で暮らしてんだ。

戦争なんて起こらない。オレたち、平和に生きてんだろ？」

アカデミーの自警システムは完璧だ。

犯罪をおこす者はほとんどいない。

新聞の一面を、凶悪事件が飾ることもない。

「だつたら何故、”貴族”は自らをこの街に閉じ込める必要があるんだ？

自然にも勝る遺伝子を持っているのなら、城壁なんか取り壊して、外の世界へ住めばいいじゃないか。

わざわざ城壁で街を覆っているのは、外の世界に我々以外の”存在”があるとしたか……」

「おい、ジーン。災害が起こったのは何時だと思う？1000年も前の話だ……」

星の自己修復機能はまだ完全じゃないし、仮に外の世界とやらに”貴族以外の存在”があつたとしても、生きられるわけがない。」

大災害後の世界と人類の遺伝子について纏めた学者もいるほどだ。”貴族”は外の世界に適応できる遺伝子を持つてはいるが、実践するととなると人手が足りないのだった。

「でも…俺…夢を、見たんだ。戦争の夢だ……。この街のどこかに”皇帝”がいて、外の世界に生きる”教皇”を倒そうと目論でる。人手が足りないから、クローン技術を発達させて人を増やして…。全面戦争が起きる…夢だ……」

「まあ、災害以前なら戦争なんていくらかでもあつただろうがなあ。中世史をめくれば、そりゃもう腐るほど。…ジーン、現実を見るよ。」

此処より平和な世界が何処にある？

この街は…退廃した星から見れば、理想郷ってところだろうな。」

「もし、教皇が攻めてきたらどうする。平和ボケした阿呆どもの巢窟は…木端微塵だ……」

いつになく真剣な表情のジーンを、ヨハンは笑い飛ばすことができなかった。

だが、Genetic Bibleなど闇市でもアカデミー・ヴィ
ヴリオテクでも見たことはない。

戦争の話も、教皇と皇帝の話も、伝承の中にすら残されていない。
ジーンは何故に、ここまで異端じみた話を信じるのだろうか。

「おい、まさかその夢にでてきた、”この街のどこかにいる皇帝”
探してもするんじゃねえだろうな？」

「いや……そこまでは……」

ジーンは確信が持てなくなっていた。

Genetic Bibleも、ある闇商人から買ったもので、何
処からきたのかわからずじまいになっている。

「その本の話は誰にもするなよ。頭がおかしくなったと思われる、
アカデミー本部に連れて行かれちまうからな。」

「ああ……………」

イエルデイスから本を受け取り、鞆にしまいこむ。
黒馬車の動きが止まった。

暗幕の隙間から、豪華な屋敷が見えた。

「…着いたぞ、」

イエルデイスが真つ先に馬車を降りる。
その横顔は安堵に満ちていた。

PDF小説ネット発足にあたって

PDF小説ネット（現、タテ書き小説ネット）は2007年、ルビ対応の縦書き小説をインターネット上で配布するという目的の基、小説家になるうの子サイトとして誕生しました。ケータイ小説が流行し、最近では横書きの書籍も誕生しており、既存書籍の電子出版など一部を除きインターネット関連に横書きという考えが定着しようとしています。そんな中、誰もが簡単にPDF形式の小説を作成、公開できるようにしたのがこのPDF小説ネットです。インターネット発の縦書き小説を思う存分、堪能^{たんのう}してください。

この小説の詳細については以下のURLをご覧ください。
<http://ncode.syosetu.com/n8514m/>

Genetic Code -Apocataxis-

2011年10月7日14時33分発行